

●第五回常民文化研究講座

絵画資料と民具研究——四季耕作図研究の現段階と可能性

第五回常民文化研究講座の開催趣旨

第五回常民文化研究講座は、常民文化研究所の神奈川大学招致二〇周年記念行事の第二年目の取り組みである。一九八〇年、大学内に招致検討委員会が発足し、翌八一年に財団法人日本常民文化研究所理事長と神奈川大学理事長との間で研究所の移譲に関する「覚書」が交わされ、八二年四月から神奈川大学日本常民文化研究所は活動を開始した。それから二〇年が経過した。

招致二〇周年を控えた二年前の研究所の会議で、所長橘川俊忠より次のような提案がなされ承認された。すなわち、二〇年は一つの節目、人間なら成人式にあたるので、この二〇年を振り返り今後の常民研の活動の方向を見定める必要がある。ところで常民研は、漁業・海の世界の研究と民具・物質文化の研究を二つの大きな柱としてきたし、財団法人常民研と神奈川大学との覚書でも、神奈川大学常民研がこの二つの柱を引き継ぐことが明記されている。そこで二〇〇〇年の常民文化研究講座は山口徹所員の担当で漁業を中心としたテーマで開催し、二〇〇一年は河野通明所員の担当で民具を中心としたテーマで取り組むというものである。この線に沿って昨年の第四回常民文化研究講座は

「漁業における歴史と民俗」のテーマで開催された。その内容は『歴史と民俗』一七号に収められている。

今年の第五回講座はこの二〇周年行事の二年目で、民具を中心としたテーマで河野がコーディネーターを務めるということになるのだが、さて民具といっても具体的に何をとり上げるかとなると、このところ研究がやや低調気味な民具分野にあつては、おのずと四季耕作図にテーマが絞られてきた。それは四季耕作図はいまホットな分野であるとともに、研究形態とか研究体制といった面でも特色ある展開を見せており、民具研究の今後をさぐる上でもいろいろ参考となる可能性を含んでいるという点で、二一世紀の冒頭を飾るにふさわしいテーマと考えられたからである。

講座は次のような構成をとった。まず第一報告は山口徹所員による「民具研究の歴史性と現在性」、これは日本常民文化研究所における民具研究の重要性を再確認するものである。

つづく第二報告以下が四季耕作図に関するもので、「四季耕作図研究の現段階と可能性」のサブテーマのもと、河野通明「博物館活動と四季耕作図研究」で研究状況を概観し、ついで小野一之（府中市郷土の森博物館）「幕末外国人の日本スケッチと粉本」、佐川和裕（大磯町郷土資料館）「守屋家掛幅と四季耕作図研究」、加藤隆志（相模原市立博物館）「描かれた農耕の世界」展の経験から、藤井裕之（吹田市立博物館）「摂津の四季耕作図——月次絵の継承と展開」、畠山豊（町田市立博物館）「描かれた水口祭り・焼米搗き」と、ここ数年四季耕作図展に携わるなど研究の推進力となってきた学芸員諸氏五名にご出馬ねがって、多方向に展開している四季耕作図研究の最前線を見てもらうことにした。一報告の持ち時間四五分、そこに多数のスライドが含まれるという詰め詰めの構成であったが、ねらいはひとまず成功したようで、参加者からのアンケートの結果は好評であった。

それでは当日の報告をベースに新たに書き起こされた原稿を、プログラムの順に沿って掲載することとしたい。

（第五回講座コーディネーター 河野通明）